

物語の「禁忌」について

2022/03/31



いよいよ、NHKの土曜講座が始まります。第1回は、ワーグナーの《ローエングリン》です。

この古くからある「ローエングリン」の物語も、「してはいけない」という「禁忌」(きんき)がテーマになっています。ローエングリンは、エルザに会ったときから、「あなたは、私に、決してたずねてはならない — 私がだれであるか、私がどこから来たか、私の素性はなんなのか、を」といいます。これは「禁問の動機」となってオペラの中で出てきます。『古事記』のイザナギとイザナミのお話やギリシャ神話のオルフェオとユウリディケに出てくる「禁忌」も有名です。日本の昔話の「夕鶴」も禁忌がテーマです。私たちは、「いったい『禁忌』とはなにか」をこのオペラを観ながら解いていきましょう。

— という言葉で、この講座を始めます。

白鳥の騎士ローエングリンと王女エルザが出会ったときに、のっけから、ローエングリンは「禁忌」を告げます。「禁忌」とは、文字通り「忌み嫌うこと」で、神さまが、神聖な立場を守るために、人間に禁じる事や言葉のことです。ローエングリンの「禁忌」は、神であることの約束上、人間には、自らの素性を明らかに出来ないのです。そのことを「訊いてはならない」と強くエルザに命じたのです。日本の神さまの話がでてくる『古事記』でも、そうです。また、日本の昔話の『夕鶴』でも、鶴が、「自分の姿をのぞいてはいけない」

と「禁忌」の言葉を発します。

なぜ、神さまにも、動物にも、「禁忌」があるのでしょうか？

それは、この世が三つの別々の世界で出来ているからです。天上の神の世界と地上の人間の世界と動物の世界の三つです。この世界は、厳格に区別されていて、それぞれが、交流することはできないのです。人間は神にはなれません。また、動物にもなれません。特に、結婚はできないのです。そのことを、厳しく禁止するために、わざわざ、神話や物語として、子々孫々に、「禁忌」として伝えたのです。

ギリシャ神話のオルフェオの物語は、NHKの木曜講座で、モンテヴェルディの《オルフェオ》で観ていきます。

この《オルフェオ》もまた、神話の重要な物語をオペラにしたのもので。黄泉の国へ、亡くなった妻エウリディーチェを迎えに行くオルフェオは、連れ帰るときに、黄泉の国の王さまプルドンから、「地上に出るまで決して後ろを振り返って妻の顔を見てはならぬ」と「禁忌」の言葉を告げられます。しかし、オルフェオはそれを守れず、途中で振り返って妻の顔を見てしまいます。妻のエウリディーチェは、再び地獄に連れ戻されて、オルフェオは永遠に妻を失うのです。これは、「人間の世界と死んだ者の世界は決して一つにならないのだぞ。死んだ者は決して生き返らないのだぞ」ということを言っているのです。一度、死んだ人は、どうやっても、生き返らないのです。生きた人間と死んだものとは、決して、結婚して一緒に暮らせないのです。

神話では、このように、大事な約束事は、必ず、「禁忌」で告げられます。そして、それが、必ず破られて、すべて、悲劇で終わるのです。

歌劇《ローエングリン》でも、ローエングリンから、「素性を聞くな！」と禁忌を告げられたにもかかわらず、エルザ姫は、結婚式の夜、神の代理人ローエングリンに素性を聞くのです。それで、結婚は破れ、ローエングリンは神の国へ帰っていき、エルザ姫は死ぬのです。神と人間は、決して、結婚して一緒に暮らせないのです。

「夕鶴」でも、おつうが、「決して、私が機(はた)を織る姿を見てはいけませんよ」と禁忌をつげるのです。でも、夫の与ひょうは、観てしまいます。そして永遠に妻を失うのです。動物と人間は、決して、結婚して一緒に暮らせないのです。

帰り道で、妻の顔を見てしまったオルフェオは、愚か者です。また同様に、決してのぞいてはならぬと言われていたにもかかわらず、のぞいてしまった与ひょうもまた、愚か者です。エルザ姫も、また、愚かです。でも、禁忌を犯すのが人間です。禁忌を犯さなければ人間ではありません。人間は、好奇心が強く、あきらめが悪いのです。禁忌は、犯してみなければ、そのことの重要さは分かりません。禁忌を犯して、心底、悔やまなければ、決してあきらめません。それが、人間です。さあ、あなたも、私も、人間です。悔やみながらも、健気に、生きていきましょう。

都築正道